

The Roles of Relationship Lending and Utilization of Soft Information on Bank and Performance in Competitive Local Markets

神戸大学 與三野 禎倫
神戸大学大学院 中 岡 孝剛

我が国では、2003年の金融審議会報告『リレーションシップバンキング（以下、リレバン）の機能強化に向けて』以降、中小企業金融に対する一つのビジネスモデルとして注目を集めるようになっており、学会においても日本のマイクロデータを用いた研究が蓄積されている。しかし、それは企業側のデータを用いた分析であり、銀行がリレバンによるソフト情報の利用によって、パフォーマンスを向上できるのかどうかは分析されていない。

そこで本稿では、地域金融機関（地銀、第二地銀、信用金庫）に対するアンケートデータを用いて、リレバンによるソフト情報の利用が、貸出パフォーマンスに影響を及ぼすか否かを分析している。具体的にはアンケートデータを因子分析することで、3つのソフト情報の利用に関する潜在変数（企業の組織形態に関するソフト情報、企業の取引関係に関するソフト情報、企業の事業と経営者に関するソフト情報）を抽出し、貸出収益率と不良債権比率との関係を分析している。

分析の結果、ソフト情報の利用は、銀行の貸出収益率を向上させ、統計的に有意ではないが不良債権比率を低下させることが示された。特に抽出された3つの潜在変数の中でも、収益性の向上において、企業の取引関係に関するソフト情報が最も重要なソフト情報となっていることが示されている。また、競争的な市場において、ソフト情報を利用することで貸出における収益性を確保できることが示された。

これらの結果はリレバンの研究における新たな発見事実であり、貸出技術の発展による他業態の競争圧力の増加に対して、リレバンによるソフト情報を利用した貸出方法が、地域金融機関の収益確保に寄与していることを示している。